

五島産焼酎で町おこし

新上五島町の「五島灘酒造」が3月から、五島列島初の焼酎づくりを始めた。酒税法改正を受け、国が65年ぶりに焼酎製造への新規参入を認め実現した。原料の芋は町内の耕作放棄地を活用して生産した。ところが、旗振り役の前社長本田修一さんは1月、初仕込みを目前に56歳で急逝した。社長職を引き継いだ妻・喜美代さん(49)は「焼酎で町おこしを」と願っていた夫の夢をかなえたい」と意気込む。

(迫田修一)

旗振り役の社長 初仕込み目前急逝



田本修一さん (遺族提供)

中通島の山間部を通る県道沿いに、昨年10月完成した同社の焼酎工場があった。焼酎づくりは3月4日に始まったばかり。今は麴づくりの真っ最中で、甘い香りが辺りに漂う。「島民の期待を感じる。飲んだ後にホッとする優しい味に仕上げたい」。真新しい蒸留器を見上げながら、杜氏の黒瀬弘康さん(48)が声を弾ませた。

初回の仕込みでは3トンの製造を予定。早ければ8月にも1本720ミリ・



①焼酎工場の真新しい蒸留器を前に「夫の遺志をかなえたい」と誓う喜美代さん
②昨年10月に完成した五島灘酒造の工場

妻「遺志受け継ぐ」

め、焼酎製造への新規参入を認めなかったが、2006年1月の酒税法改正で「地元産の農産物を使用」「年間製造量100トンを以内」といった条件付きで認可。規制緩和を受け、同町で官民の推進組織「焼酎造ろう会」が発足。焼酎づくりの担い手を募集したところ、田本さんが手を挙げた。

田本さんは建設会社を経営。その傍ら、荒廃が進む古里の田畑を心配し、6年前から自ら畑を耕しジャガイモなどを栽培していた。そんな中で焼酎製造の話を知り、佳史さん(26)に伝えるなど、新に伝えるなどしていた。

「万一の時、どうするの？」喜美代さんは誰に問いかけた。ではやってほしい、さんは静かに答えた。「他人に会ったときも考えたが、今は夫が亡くなったばかりで、病気で「治してみよう」と復帰への意欲を語っていた。亡くなった1月9日の朝も体の痛みをこらえながら「運転資金が足りないから、何とかしなければ」と電子メールで長男・佳史さん(26)に伝えるなど、佳史さんも焼酎の原料の「黄金千貫」の戸が約7割ものを耕し、収穫も喜んでいまの新たな特産品を推す。問いかた(095)。



佳史さんも焼酎の原料の「黄金千貫」の戸が約7割ものを耕し、収穫も喜んでいまの新たな特産品を推す。問いかた(095)。